

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

# 新 知 人 温 湯

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2012.12 Vol.21

平成24年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター  
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号  
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125  
http://www.suac.ac.jp/library/

## Contents

### ■表紙

『パラディオ図面集』—— ①

### ■図書館散歩

戯曲を読む —— ②

静岡文化芸術大学 副学長  
文化政策学部 芸術文化学科 教授  
大学院 文化政策研究科 教授  
高田 和文

汝自身を知るための本 —— ③

デザイン学部 生産造形学科 教授  
大学院 デザイン研究科 教授  
迫 秀樹

### ■特別企画

有馬朗人理事長インタビュー

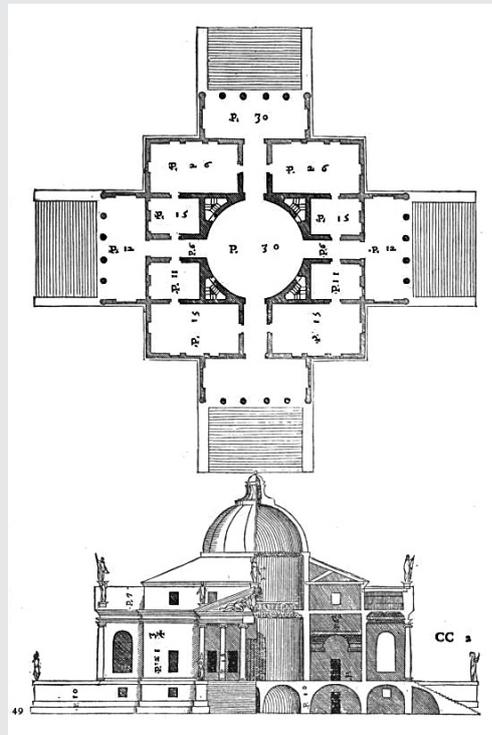
読書を通して深めた —— ④

物理学、考古学への興味

～幼少期から現在までの読書体験で  
感じたこと、考えたこと

### ■巻末

図書館ニュース —— ⑤



## 『パラディオ図面集』

オッタヴィオ・ベルトッティ・スカモッツィ著  
中央公論美術出版 1994. [523.37/B 38]

『Le Fabbriche e i Disegni di Andrea Palladio』（『パラディオ図面集』）は、建築家・著作家のオッタヴィオ・ベルトッティ・スカモッツィ（Ottavio Bertotti Scamozzi, 1719-1790）による長年の調査研究の成果として、1776年から1783年の間に全4巻の書物として出版されました。この著作は、スカモッツィが詳細な測量にもとづき平面図・立体図・断面図を描き、解説を加えています。その結果、パラディオの成果を明確な形で後世に伝達し、パラディオ研究に決定的な貢献をしています。また、当時出版された図入りの書物の中でも非常に優れたもので、貴重な文献として希少価値を持っています。

この本は、金沢工業大学ライブラリーセンターが所蔵する同書初版本の図版の中から、30作品、全62点の図版を厳選し、原寸大で復刻したものです。

参考文献  
・オッタヴィオ・ベルトッティ・スカモッツィ著、長尾重武編、『パラディオ図面集』ファクシミリ版 別添冊、中央公論美術出版、1994. [523.37/B 38]



静岡文化芸術大学 副学長  
文化政策学部 芸術文化学科 教授  
大学院 文化政策研究科 教授  
**高田 和文**  
Takada Kazufumi

本文中に登場した資料

アーサー・ミラー[著]；鳴海弘[訳] 『セールスマンの死』 [932.7/Mi 27/1]
テネシー・ウィリアムズ[著]；鳴海四郎[訳] 『ガラスの動物園』『欲望という名の電車』 （『テネシー・ウィリアムズ戯曲選集』） [932.7/W 74/1-2]
イブセン[著] 『人形の家』（『世界名作全集』17） [908/Se 229/17]
チェーホフ[著]；神西清ほか[訳] 『かもめ』『桜の園』『三人姉妹』 （『世界の文学セレクション』） [908/Sh 69/22]
井上ひさし[著] 『闇に咲く花』『きらめく星座』 『イーハトーボの劇列車』 『人間合格』『父と暮せば』 （『井上ひさし全芝居』） [912.6/I 57/1-6]
シェイクスピア[著]；小田島雄志[訳] 『ハムレット』『マクベス』『オセロー』『リア王』 『ロミオとジュリエット』『ヴェニスの商人』『十二夜』 （『シェイクスピア全集』） [938.5/Sh 12-5/1-5]
サミュエル・ベケット[著]；安堂信也ほか[訳] 『ゴドーを待ちながら』 [952.7/B 31/1]
イヨネスコ[著]；諏訪正ほか[訳] 『授業』『椅子』『犀』 （『イヨネスコ戯曲全集』） [952.7/I 61/1-4]
ハロルド・ピンター[著]；小田島雄志ほか[訳] 『管理人』『誰もいない国』 （『ハロルド・ピンター全集』） [932.7/P 66/1/2]
別役実[著] 『マッチ売りの少女：別役実戯曲集』 『不思議の国のアリス：別役実第二戯曲集』 [912.6/B 391]
安部公房[著] 『友達』『幽霊はここにいる』 『棒になった男』（『安部公房全作品』） [918.68/A 12/1-15]

## 戯曲を読む

私の専門は演劇研究だから、当然戯曲を読むことが多い。もともと演劇を研究対象とするずっと以前、学生時代にも戯曲をよく読んだ。そして、イタリア演劇を専門としてからは、イタリア語の戯曲を読むことが仕事の一部になった。だから、私の読書体験は普通の人とかなり違っているかもしれない。

最近の若い人は、劇場には足を運んでも、戯曲は読まないと言われる。出版関係者も「戯曲は売れない」と決め付けている。けれども、私自身は、若い人にぜひ戯曲を読むことを勧めたい。演劇を専門とするしなやかにかかわらず、理解力や思考力、そして何よりも想像力を鍛えるのに最も適しているのが戯曲ではないかと考えている。

演劇に詳しくない人のために説明しておく、『戯曲』とは演劇上演のための台本あるいは脚本のことである。また、舞台上演を想定して書かれた文学作品を指すこともある。映画やテレビ用の台本は「シナリオ」と呼ばれる。

戯曲は登場人物の話し「台詞」とその動作や心理、場面の情景を示す「ト書き」から成っている。この点で、戯曲は小説とは根本的に異なる構造を持っている。小説の読者はたいてい、書かれた文をそのままどって読み進んでゆく。描かれた情景や人物の内面をなぞりながら、その世界に没入してゆくとところが小説を読む楽しみだろう。ところが、戯曲の場合は複数の人物の台詞が並列して書かれている。ある人物の台詞の後にすぐに別の人物の台詞が続く。3人、4人の台詞が交錯することもある。特に現代の戯曲には、人物どうしが全くかみ合わない会話を交わしたり、相手の言葉を誤解したり、無視したりする場面が多い。言葉や感情のすれ違いを、書かれた文字の行間から読み取るのはなかなか難しい。戯曲は言ってみれば「立体的な構造」を持っているのであり、そこを理解しないと面白さが分からない。読者は想像力を働かせると同時に、人物や場面に応じて瞬時に頭を切り替えながら読み進まなければならない。慣れないうちは読むのが辛く、苦痛に感じられるかもしれないが、ぜひ挑戦してもらいたい。

では、どんな戯曲を読んだらいいのか。私の体験をもとに、学生の皆さんに読んで欲しい作品を挙げることにする。

まず勧めたいのが、リアリズムの手法で書かれた戯曲である。状況設定が日常的で、会話も自然に展開してゆく。作家で言うと、アーサー・ミラーやテネシー・ウィリアムズ、やや古くなるがヘンリック・イブセン、アントン・チェーホフなどである。外国の作家ばかりなのは、リアリズム演劇が主流をなしたのが、ヨーロッパ、アメリカだったからだ。作品としては、『セールスマンの死』、『ガラスの動物園』、『欲望という名の電車』、『人形の家』、『かもめ』、『桜の園』、『三人姉妹』など。どれも外国語から翻訳されたものだが、ほとんどが上演台本をもとに出版されているので、それほど読みにくさはないはずだ。

日本の劇作家では、先年亡くなった井上ひさしを挙げたい。多くの傑作があるが、私が気に入っているのは『闇に咲く花』、『きらめく星座』など、平凡な庶民を主人公に現代史の断面を描いた作品。社会性と喜劇性が程良く調和している。同じ東北出身の文学者の宮沢賢治、太宰治の生涯を描いた『イーハトーボの劇列車』、『人間合格』も面白い。父娘2人の対話劇『父と暮せば』は、戯曲になじみのない読者にも読みやすいのではないかな。

リアリズムの演劇にある程度なじんだところで、やや傾向の違う戯曲に挑戦してみてもどうだろう。まず、劇文学の最高峰とされるシェイクスピア。『ハムレット』、『マクベス』、『オセロー』、『リア王』の四大悲劇をはじめ、『ロミオとジュリエット』、『ヴェニスの商人』、『十二夜』など、多数の名作がある。シェイクスピアについてはいくつもの翻訳があり、訳者によって印象も違ってくる。最も新しいのが松岡和子訳だが、文体としてはむしろ小田島雄志訳のほうが現代的である。少し古くなるが、福田恆存訳も格調があり、今でも上演台本として使われている。

次に挙げたいのが、いわゆる不条理劇。呼び名からして難解なイメージを与えるが、実際、書かれた文字だけを読んでもその面白さはなかなか分からない。ちくはぐな会話、言葉と行動のズレ、沈黙や過剰な言語が劇の魅力になっているからだ。登場人物がどこか異様で、物語も非現実的な設定が多い。舞台を見れば一目瞭然でも、文字で読むにはかなりの想像力が要求される。作品としては、不条理劇の代名詞でもあるサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』、ウジェーヌ・イヨネスコの『授業』、『椅子』、『犀』、ハロルド・ピンターの『管理人』、『誰もいない国』など。

不条理劇の日本の代表的作家が別役実だろう。学生時代に読んだ『マッチ売りの少女』や『不思議の国のアリス』には新鮮な驚きを感じた。安部公房の『友達』、『幽霊はここにいる』、『棒になった男』もこの系譜に入る。

戯曲を読むことに慣れたら、さらに勧めたいことがある。実際の上演時間に近いスピードで読むこと。つまり、2、3時間で一気に1つの戯曲を読み切るのである。それができるようになれば、きっと戯曲を読むことが楽しくなるはずだ。



デザイン学部 生産造形学科 教授  
大学院 デザイン研究科 教授

迫 秀樹

Sako Hideki

### 本文中に登場した資料

ヒュー・ロフティング[作]；井伏鱒二[訳]  
『ドリトル先生航海記』  
(『ドリトル先生物語全集』2)  
[933.97/L 82/2]

コンラート・ローレンツ[著]；日高敏隆[訳]  
『ソロモンの指環：動物行動学入門』  
[481.78/L 88]

デズモンド・モリス[著]；日高敏隆[訳]  
『裸のサル：動物学的人間像』  
[468/Mo 78]

立花隆[著]  
『サル学の現在』  
[489.9/Ta 13]

佐藤方彦[著]  
『人間工学概論』  
[509.6/Sa 85]

佐藤方彦[著]  
『人はなぜヒトか：生理人類学からの発想』  
[408/B59/618]

佐藤方彦[著]  
『感性を科学する』  
[701.1/Sa 85]

佐藤方彦[編]  
『人間を科学する事典：  
心と身体のエンスايクロペディア』  
[491.3/Sa 85]

フランス・アッシュクロフト[著]；矢野野郎[訳]  
『人間はどこまで耐えられるのか』  
[491.3/A 92]

## 汝自身を知るための本

「汝自身を知れ」という古代ギリシアの格言がある。古代都市デルポイにあった神殿の入り口にこの言葉が彫られていたそうだ。誰が言い出した言葉なのかも定かではないが、「自分の身のほどを知れ」、「自己を探求せよ」などと解釈されている。自分が人間であり、そして人間はホモ・サピエンスという生物界の一種とすれば、自己の探求とはホモ・サピエンスを理解することである。これまで私は使用者の満足度を高めるという観点で人間の反応を捉える実験を行ってきたが、その基本となるのはヒトという生き物を探求したいという思いだろう。授業でも「ヒトとは分かりにくいものであるが故、ヒトに対する不思議さを忘れないようにしましょう」と常に訴えている。今回はこの欄を通し、私にそのような考えを持たせてくれて人間工学という分野に誘ってくれた図書たちを紹介していきたい。

まず小さな頃に乱読した本の中では、ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生航海記』が強く記憶に残っている。全部で12巻あるため、親に購入して欲しいとは言えずに図書館で借りて何度も読んだ。魅力はなんと言っても人間と動物が会話をするという点にある。家には様々な動物一とはいえずやや小鳥程度であるがーがいたため、動物の気持ちや行動の理由が分かればどんなに面白だろうと考えていた。

ドリトル先生シリーズはあくまでもファンタジーだったが、大学生となって出会ったコンラート・ローレンツの『ソロモンの指環』は観察という手法で動物を理解できると教えてくれた。ローレンツは鳥類や魚類などの研究から刷り込みや鍵刺激などの概念を広めた動物行動学者である。本のタイトルである『ソロモンの指環』は、ソロモン王が魔法の指環をはめて動物や魚と語ることが出来たという言い伝え(本来は博学だったために動物について多くを語ったと旧約聖書に記されているだけだが)によるものだ。動物の観察に基づく知見を分かりやすく書いたこの本は動物行動学の入門書と言える。

そういった動物行動学における刺激と本能的な行動との関連について、ヒトにも当てはめて考えたのがデズモンド・モリスである。彼は『裸のサル』において「ホモ・サピエンスはこれほど博学にはなつたけれど、なお一個の裸のサルにすぎない(日高敏隆訳)」と述べ、ヒトを特別な存在と位置づけるのではなく、生物界の一種であることから動物行動学における多くの知見がヒトにもあてはまると主張した。日本でも人類学の多くの研究者がサルを研究している。サルを研究することでヒトの特徴が浮かび上がるからである。ヒトとサルの違いに興味を抱いた方は、そういった研究をまとめた『サル学の現在』を一読されたい。

さて、それらの基礎となった図書とは別に、恩師の薫陶もまた当然ながら土台となっている。私の恩師は佐藤方彦先生で、最初に書かれた『人間工学概論』は難しい内容だった。ちなみに先生がこの本を書かれたときはまだ30代。その年齢を超えた私がこれを書けるかという甚だ疑問である。さらに先生はブルーバックスで『人はなぜヒトか』を書かれた。こちらはヒトの様々な特徴における生理学的反応やメカニズムを平易に紹介した内容である。また、最近では『感性を科学する』において幾つかの絵画を例にとりながら感性という曖昧模糊なものを脳科学、生理学といった視点から論じられている。いつまでも恩師にはかなわない。

このような守備範囲が広く深い先生の教えを受けて、大学院ではヒトの光や温熱に対する反応を研究するようになった。そういった大学院時代の研究成果を先生の本に載せてもらった時は、僅かながらでも認めてもらったような気がしたものだ。そしてしばらく研究を重ねると、事典への執筆に声をかけてくださるようになった。結果として幾つかの本に参加させてもらったのだが、中でも『人間を科学する事典』は思い出深い。いつもは専門家に向けて疑問を持たないように書くのに対し、この本は一般的な読者を対象としていて一つの項目がエッセイ風に1~2頁ある。専門用語は使えない上に、何より興味を持たれる内容を混ぜなければならない。そのためにヒトの限界に関するエピソードを探していた時に見つけたのが『人間はどこまで耐えられるのか』。著者は生理学者である。こういった類書は出所がはっきりしない疑わしい内容が多いのだが、この本は低圧・高圧・低温・高温…と様々な条件に対する人間の限界を紹介してくれる。中には予想されている限界を遙かに超えた報告もあるなど、ヒトの不思議さについて再確認できる本である。

このような経緯をたどって現在の考え・専門に至るわけだが、結局のところヒトはまだまだ分からないところだらけとしか言いようがない。そしてこの欄を書きながら恩師の本を懐かしく読んでいると、自分の身のほどを知らねばならないと痛感する。まさに「汝自身を知れ」と再確認した次第である。

## 読書を通して深めた物理学、考古学への興味

～幼少期から現在までの読書体験で感じたこと、考えたこと

有馬 朗人（公立大学法人静岡文化芸術大学 理事長）

聞き手 黒田 宏治（図書館・情報センター長）



### 読書スタイルの変化

**黒田** 本日は有馬先生に、読書や図書館をテーマにお話を伺ってきたいと思います。「今の若者はあまり読書をしない」と言われますが、時代と共に読書のスタイルが変化してきているのかもしれませんが。

**有馬** それぞれの時代に、図書に対するアプローチの仕方があると思います。現代に著しい特徴と言えば、コンピュータを中心とした情報化ですね。私は非常に有難いと思っていることがあって、それは小さな電子辞書です。これが結構、役に立つのです。俳句の例で言うと、これまでは歳時記と称する重い本を常に持ち歩かなければならなかった。携帯用の小さな歳時記でもそれなりに重くてね。ところが、小型・軽量の電子辞書に、歳時記が搭載されているものがあり、とても便利で活用しています。

もう一つ、私は昔、しょっちゅう辞書を引いていました。特に、広辞苑、漢和辞典、大言海などをよく使ったものですが、こういった辞書・事典類も電子辞書に搭載されており、電子辞書を持っていれば、どこでも言葉や漢字を調べたり、季語や歳時記を引けたりするわけです。海外にも持って行ける。そのような意味で、かつては辞書・事典は図書館で調べるなり書齋に置くなりしたのですが、今は冊子に当たらなくても調べられるようになった。若者には、この傾向がもっと甚だしいでしょう。

それから、インターネット上にはウィキペディアという便利なツールがあり、どのくらい信用してよいのか分からないこともあります。ちょっと物事を調べたいときにパッと出てきて便利です。また、中には携帯端末で調べている学生もいます。携帯電話があれば写真を撮れるし、キーワードを打ち込めば多くのことを調べられ、情報を入手することもできる。そのような意味で、図書や情報に対するアプローチが全く変わってきていますから、このことは考慮しないといけないでしょう。

**黒田** 電子化の進展が、読書のスタイルを変化させたということですね。

**有馬** それに関連して、電子書籍が話題になっています。これが今後、大きな変革を及ぼすだろうと思います。当初、もっと早く普及するだろうと言われていましたが、意外と遅かった。1981年に私が日本物理学会の会長になったとき、海外の出版社から「これからは電子書籍の時代です。日本物理学会に入っているジャーナルや研究雑誌も電子化した方がいいですよ。それから、既に海外のこの雑誌はもう電子化されたので、冊子ではなく電子版を購入してください」と言ってきたのです。その時に「電子ジャーナルは日本ではまだ一般的ではない」と言ったら「世界では流行ってますよ」と言われたのですが、普及が進んだのはずっと後で、世界的に見ても2000年代に入ってようやく電子ジャーナルが本格化しました。

私はどちらかと言えば冊子体を選びますが、論文を紙で、ページをめくって読むのではなく、パソコンで読む時代が来ました。若者はもっと進んでいるでしょう。今後10年くらいの間には、電子書籍の普及が一気に進む可能性があります。

**黒田** 情報が紙媒体から電子化されることによって、どのような変化が考えられますか。

**有馬** 電子化が進めば、今までのような紙に印刷した図書を残す必要があるかということになり、これは図書館にとって大きな問題です。理系のジャーナルは多くが電子化され、図書館の省スペース化に役立つということで普及が進んでいます。問題の一つはその耐久性で、時間的にどのくらい持つのかということです。電子媒体がいったい何年続くのか、正確には分かりませんが、紙による文化の伝承は、今後も残るだろうと思います。今のところ、人類が持っている文化の伝承、特に文章として伝承していく上では、紙が一番良い。だから、利便性に優れた電子書籍が増えても、やはり最終的にはどこかで紙に写しておく必要があるし、紙の本は今後も残るだろうと思います。そのような意味でも、図書館の存在意義は続くでしょう。

また、かつて図書館はどこもカード目録で、丹念にカードをめくって目的の図書を探したものでした。東京大学の図書館でも、この目録を電子化して、全国の図書館とネットワーク化しようとする試みを始めましたが、実現までには随分と時間と苦労を要しました。

**黒田** 確かに便利な電子化ですが、すべての分野に当てはまるのでしょうか。

**有馬** 古典的なものの研究をしたり、勉強したりという時に、情報手段だけでは難しい場合があります。例えば、藤原定家の自筆の書について、図書館で複写を所蔵していることがあります。こういったものは、電子化された情報では、学術的にどこまで究められるのかわかりません。こういった書のほか、絵画といった芸術作品の作品集など、電子化された情報では芸術的な要素をカバーし切れないのではないかと思います。たとえコピーでも、昔流の紙媒体の資料に当たる方ははるかに本物に近いし、電子媒体ではカバーし切れないものが図書、そして図書館にはあるはずで、一方、科学や技術など、電子化に相応しい分野もあります。

文学作品にしても、これまでに刊行されたものを全てを電子化するのは無理でしょう。松尾芭蕉の言葉に「不易流行」※があります。「流行」の部分は電子媒体でも良いでしょうが、「不易」の部分は紙で残し、何らかのかたちで図書館が役割を果たすべきだと思います。このところの出版を見ていると、発行される図書の数が非常に増えていますが、紙の本が大きく減っているわけではない。依然として、皆さんは紙の本を読みたいんじゃないかと思うのです。また、若者が勉強するときにも、情報化したからと言って、パソコンに向かってキーワードを入力すれば何でも答えが出てくるわけではない。ここにありそうだとか、少なくともここにこのような図書があるとか、図書館は様々なヒントを与えてくれます。

**黒田** 情報が過度に進むと、情報過多というか、情報の氾濫といった状態になりますね。

**有馬** 今は情報化のスピードが速くなっています。我々の頃はいちいち本を読みながら調べたけれども、今ははるかに早く情報を入手できる。現代の人の方がより早く、様々な情報を入手しやすくなっていて、それは良いことだと思います。

特に戦後は、字の書いてあるものなら何でも喜んで読むというように、いわば情報に飢えた時代でした。今は、そのような飢えはない代わりに、非常に多くの情報から自分の必要とするものを正確に選び出すこと、つまり情報の取捨選択の技術が重要だと思います。

## 物理学、考古学への誘い<sup>いざな</sup>

**黒田** 先生の思い出に残っている本を教えてください。

**有馬** 私には、子どもの頃から非常に親しんだ本が2冊あります。1冊は、小学校3年の春に両親から買ってもらった本で、石原純<sup>\*</sup>という東北大学の教授が編集した『世界の謎』という本です。物理と生物、それに考古学の世界の謎が書いてある本でした。私はその中で、生物にはあまり関心を持たなかったのですが、物理と考古学に大変興味を持ちました。考古学は今でも好きですが、物理をやったらどうかというヒントを与えてくれた本でした。自分で実験したり、それ以外の本をたくさん読んで物理学者の道を選んだのですが、最初に物理の面白さ、特にX線の面白さや不思議さを勉強したときに読んだのがこの本だったのです。

もう1冊は、夏目漱石の弟子で子ども向きの小説や童話を書いた鈴木三重吉が翻訳した『古事記物語』で、これも小学校3年生の頃から読んで、日本神話だけでなく、世界の神話に興味を持たせてくれました。ところが、中学校3年生の時、2冊とも浜松の空襲で焼けてしまいました。

**黒田** 大切な本が焼けてしまったんですね。

**有馬** 大事にしていた本だったので残念でしたね。その後、浜松の北の敷地村という所に疎開するのですが、そこで私の先輩のひとりが、何冊か本を貸してくれたのです。浜松第一中学校の3年生の秋でした。その本は、アインシュタインとその弟子のインフェルトが書いた『物理学はいかに創られたか』でした。これも、石原純の翻訳です。私はその上下2冊をずっと読んでいて、進学して東京に行った後に改めて買って、今でも私の本棚にあります。その本には、ギリシャ以来の物理学の発展、そして現代物理学、量子力学、相対性理論などが実に要領よく、自分の考えなども含めてきれいにまとめて書いてありました。

**黒田** 大学に進まれてから読まれた本で、印象に残っている本はありますか。

**有馬** 大学院生の時に『神・墓・學者：考古學物語』という本を読みました。面白いことが色々書いてあるのですが、中でもメキシコの考古学についてかなり詳しく書いてありました。私はメキシコの考古学を全く知らなかったのですが、「メキシコにピラミッドがある」と書いてあり、果たしてそれはエジプトのピラミッドの影響を受けているのかどうか、といったことが解説されてい



石原純〔編〕『世界の謎（日本少国民文庫10）』（新潮社、1936）

### Notes

※不易流行…蕉風俳諧の理念の一つ。新しみを求めてたえず変化する流行性こそ、永遠に変わることのない不易の本質があり、不易と流行とは根元において一つであるとし、それは風雅の誠に根ざすものだとする説。（オンラインデータベース「ジャパンナレッジ」『日本国語大辞典』より引用）

※石原純〔1881-1947〕…理論物理学、歌人。東北帝国大学助教授時代にアインシュタインのもとで学び、日本に相対性理論を紹介した。雑誌『科学』の初代編集主任も務めた。歌人としては『アララギ』発刊に参加、のちに歌誌『日光』に参加。著書に『理論物理学』、『震日（あいじつ）』（歌集）、訳書に『物理学はいかに創られたか』など。

て、大変興味深かったですね。また、メキシコにはテオティワカン※という遺跡があって、「太陽のピラミッド」と「月のピラミッドがある」と書いてあったのです。この本が考古学、特に西洋というか世界の考古学に、改めて興味を持たせてくれました。

**黒田** 実際に現地へ行かれたのですか。

**有馬** 私が36歳の時に、メキシコで物理学の国際会議があって、そこに招待されました。その時に、丸1日かけてテオティワカンをのんびりと歩いてきました。また、この本の中にユカタン半島のマヤ文明についての記述があるのですが、70歳になってから初めて見に行きました。そこには生贄を捧げた池やきれいなピラミッドがあって、『神・墓・学者』の話を思い出しました。

**黒田** 私もその分野は大好きです。考古学にせよ、神話にせよ、興味を持つと非常にロマンティックで、専門分野に直接関わるとは思いません。知識をバックアップしてくれるというか、それをヒントに得られるものがあるって、間口を広げられるような気がします。

**有馬** 先ほどの例で、そのような本を読むと、今度はメキシコに興味を持つようになります。面白いことに、メキシコの人はお尻に蒙古斑がある。モンゴルの人たちが、まだ氷が張り詰めていた頃に、シベリアの辺りから渡ってきてメキシコへ辿り着いたんじゃないかとか、じゃあエジプトの文化はどうやってメキシコに渡ったんだろうとか、色々な方向に考えが発展するのです。

## お薦めは「古典作品」

**黒田** 読書を薦めるに当たり、何か良い方法はあるでしょうか。

**有馬** やはり、古典には価値があると思いますね。古典を読んでつまらなかったということは、あまりありません。中には、自分に合わなかったものもあります。

私の読み方が悪かったのかもしれませんが、例えばドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』は、最初読んだとき「つまらない話だなあ」と思ったものです。最近、亀山郁夫さんの翻訳で読み直して「ああなるほど、こうだったのか」と思いました。原典で読めば良いのですが、それでは大変ですからね。

それから、概して日本の古典作品に裏切られることはありませんが、これもまた年齢と共に好みが変わるものだと思います。私はかつて、西行が大嫌いでした。40歳を過ぎても「何が面白いんだろう」と。当時、私は東京大学にいらしたその道の研究の第一人者である久保田淳先生と親しくさせていただいていました。今でもハッキリと覚えています。私が40歳の頃に久保田先生と昼食をとりながら「先生、何であんなにつまらない古今和歌集とか新古今和歌集を研究するのですか」と聞いたことがあるのです。それを聞いて、彼は苦笑いしていました。今考えると、呆れ返っておられたのかもしれない。

なぜ嫌いだったかという、私は正岡子規や斎藤茂吉など、アララギの影響を受けていた。彼らは「万葉集は面白いけれど、古今集はつまらない」と説いたのです。古今集や新古今集の技巧を凝らしたような作風や解釈がどうも好きになれなかったのですが、まさにその辺りのことが、久保田先生の本で解説されていたわけです。

**黒田** 万葉集はそういうのはないですね。もっと素朴でね。

**有馬** そうですね。万葉集では、柿本人麻呂とか山部赤人などが特に好きでした。スバツと言いますからね。万葉集はしょっちゅう読んでいましたから、歌はスラスラと出てくるし、何より素朴なところがいいと思います。でも、50、60、70と年を重ねていくにつれ「ああ、西行はこうだったのか」と思うようになってきたのです。

**黒田** そこに味が出てくると。

**有馬** 逆に、若い頃はボードレールやマラルメを読んで「凄いなあ」と思いましたが、最近はあまり関心がありません。どうやら、好みは年と共に変わるようです。

それでも、やっぱり何度読んでも面白いものもあります。私の場合は『古事記』や『万葉集』あたりが面白い。それから、今でも読み返して面白いのは夏目漱石、文章で言えば松尾芭蕉、俳句は与謝蕪村が好きです。

**黒田** そのようなことをきっかけに、研究分野が違う久保田先生とも親交を深められたわけですね。



C.W. ツェーラム [著]; 村田数之亮 [訳]  
『神・墓・学者：考古学物語』  
(養徳社、1955-56)

### Notes

※テオティワカン【Teotihuacan】…メキシコ市の北東約40キロにある都市遺跡。前2世紀から後6世紀にかけて建設され、2世紀には7～10万の人口を擁したといわれる。いわゆる「死者の大通り」を中心に、太陽のピラミッド、月のピラミッドが残る。1987年、「古代都市テオティワカン」として世界遺産(文化遺産)に登録された。(オンラインデータベース「ジャパンナレッジ」『デジタル大辞泉』より引用)

**有馬** たまたま同じ東大の教授だったこともあって、久保田先生からは随分と本を頂いて読んでいたのです。最近も、先生は『名歌名句大事典』という立派な本を出されて、私の俳句も載っています。久保田先生から依頼があって、この本の推薦状も書きましたが、よく考証されているし、お弟子さんたちもしっかりとしているし、久保田先生が書いていると安心するのです。私は本に好き嫌いがあって、この人の本なら読むけどこの人なら読まないとか、あるのです。

**黒田** 久保田先生の他に、よくお読みになる方はいらっしゃいますか。

**有馬** 高橋睦郎さんの著した本は面白くて、今でもよく読みます。著書を頂くこともあります。本を読むと、多くの新しいことを教わって「ああ、そうなのか」と思うことがあります。歌をつくる方は、よく勉強されていますね。

特に凄いと思うのは斎藤茂吉、現代なら岡井隆、それから、もう亡くなってしまいましたが塚本邦雄ですね。岡井隆さんは、最近では専ら森鷗外を研究されていますが、斎藤茂吉をずっと追究なさっていて「読んで良かった」と思うことが多いです。数年前に、森鷗外と茂吉、それに木下杢太郎を3人並べて『鷗外・茂吉・杢太郎：「テエベス百門」の夕映え』を著されました。

この3人に共通しているのは、東大を出た医者だということです。この本では、東大出の医者の鷗外、弟子ではないが鷗外の影響を受けている茂吉、そして茂吉の少し後輩に当たる杢太郎の3人について、丹念かつ比較文学的に検討しています。

**黒田** 皆さん医者でも歌人で、幅の広さを感じますね。

**有馬** 私は文章として、鷗外より茂吉が好きです。鷗外と漱石を比べると、漱石の方が好きで、鷗外の評価はどうしても厳しくなってしまう。

**黒田** それはなぜでしょうか。

**有馬** 私自身を、鷗外と重ね合わせてしまうところがあるからかもしれません。もちろん、私は鷗外のように偉くはないのですが、彼はちょっとしたことでしょげず、実に堂々としていた。これは私と同じく、彼が理科系だからじゃないかと思うのです。語弊があるかもしれませんが、理科系の学者はある意味、図太いんじゃないか、と。鷗外は、海外でも実に堂々と過ごしました。彼が漱石とどこが違うかと言えば、語学の専門家ではなく、外国語を恐れない。語学が分からなくても、出来ても出来なくても、使えれば問題ないと考えていたのです。手段としての言語を用いてきたのが鷗外であった。私も、語学の専門家ではありませんから。

ところが漱石は、語学がいわば食い扶持だった。語学が出来ないと、仕事にならないわけです。言葉が自分の命ですからね。

**黒田** 言葉に対するスタンスが違っていたということですね。

**有馬** そうですね。それで鷗外は、研究も、行政も、文学もやりましたが、彼は研究者としては失敗したんじゃないかと思うのです。彼は、脚気の原因が栄養によるものだと見抜けなかった。これは医者としては大失敗です。行政家としては、陸軍軍医総監に昇進し、晩年には皇室博物館の総長に就任した。そのような意味では、成功したと言えるでしょう。しかし、何と言っても文学すなわち小説は凄い。しかも、随分と勉強している。その点は尊敬していますよ。

**黒田** ありがとうございます。では終わりに、本学の学生に読書についてメッセージをお願いします。

**有馬** お薦めはやはり古典なのですが、それぞれの時代に古典があると思うのです。発刊から10年や20年経っても残っているような作品なら、もはや古典としても面白いものと言えるでしょう。例えば、村上春樹の『ノルウェイの森』。今から20年以上前の作品ですが、今読んでも結構面白いですね。

もちろん、新しい知識や情報を得るために新刊書を読むのも良いのですが、ちょうど親御さんの世代にベストセラーで、今でも残っているような作品、あるいは先生方の薦める本などを読むと良いでしょう。必ずしも、時のベストセラーに飛び付く必要はありません。



#### ◆インタビューで紹介された図書

- ・石原純 [編] 『世界の謎 (日本少国民文庫 10)』 (新潮社、1936) [375.42/I 74]
- ・鈴木三重吉 [著] 『古事記物語』 (原書房、2003) [913.6/Su 96]
- ・アインシュタイン、インフェルト [著]; 石原純 [訳]  
『物理学はいかに創られたか (改版)』 (岩波書店、1963) [081/I 951/50-51]
- ・C.W. ツェーラム [著]; 村田数之亮 [訳]  
『神・墓・學者: 考古學物語』 (養徳社、1955-56) [209.3/C 29/1-2]
- ・ドストエフスキー [著]; 原卓也 [訳]  
『カラマゾフの兄弟 (ドストエフスキー全集)』 (新潮社、1978) [988/D 88-1/15-16]
- ・久保田淳、長島弘明 [編] 『名歌名句大事典』 (明治書院、2012) [911.103/Ku 14]
- ・岡井隆 [著] 『鷗外・茂吉・杢太郎: 「テエベス百門」の夕映え』 (書肆山田、2008) [910.26/O 38]
- ・村上春樹 [著] 『ノルウェイの森』 (講談社、1987) [913.6/Mu 43/1-2]

### ABC(自動貸出返却装置)が新しくなりました

図書館・情報センター内にあるABC(自動貸出返却装置)を更新しました。使い方は従来のABCと変わりませんが、これまでよりも画面を大型化し、タッチパネルのボタンが大きく見やすくなり、操作性・視認性が向上しました。また、操作画面は色の判別がしやすいユニバーサルデザインです。

利用方法等でわからないことがあれば、カウンターでお尋ねください。

#### ■ABC利用時の注意

- ・学生証(利用者カード)の向きを確認  
⇒磁気コード(黒いストライプの部分)が**上向き、右側**です  
⇒返却の際は、学生証(利用者カード)は不要です
- ・図書は、当センターのバーコードを上、左側に詰めて置く
- ・バーコードの読み取り動作が完了するまで、図書を動かさない
- ・レシートはきちんとチェック  
⇒**正しく貸出・返却処理できているか**確認しましょう
- ・返却処理が完了した図書は、返却台・返却用ブックトラックに置いてください
- ・適正に処理できない場合は、カウンターで手続きをしてください



# ユニバーサルデザイン絵本コンクール2012 作品募集

募集期間：2012年11月1日(木) — 2013年1月31日(木) (当日消印有効)

## 「ユニバーサルデザイン」について考えてみませんか？

ユニバーサルデザインを

理念の一つとしている静岡文化芸術大学では

身体的特性、知的特性、年齢、そして文化などを越えて

皆と一緒に楽しむことのできる絵本、

ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた絵本を募集します。

形、構成、素材などにとらわれることなく

ぜひ自由な発想で絵本をつくってください。

■応募先： 静岡文化芸術大学 絵本コンクール事務局  
(林 左和子研究室)  
E-mail:ehon@suac.ac.jp TEL/FAX:053-457-6178  
(お問い合わせはなるべくメールでお願いいたします。)

■応募資格：子ども部門(中学生以下)  
高校生部門  
大学生部門

■主催： 静岡文化芸術大学

■後援： 静岡県、静岡県教育委員会、静岡県立中央図書館  
浜松市、浜松市教育委員会、日本図書館協会  
日本図書館研究会、図書館問題研究会、絵本学会  
JBBY(日本国際児童図書評議会)(順不同)

■詳しくは、本学公式webサイトをご覧ください。

<http://www.suac.ac.jp/news/topics/1050.html>

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2011

受賞作品(一部)

子ども部門・大賞

大学生部門・優秀賞

高校生部門・優秀賞

